



愛称は「地球儀」「サボテン」など▶

▼ 富山県最大の繁華街、総曲輪通りのアーケードも操さんのデザイン。ネオンの明滅で花馬車が動いているように見えます。



戦後、日本のグラフィックデザインを牽引していた亀倉雄策さんも旧吉田町の出身です。4歳年下の操さんもまた、デザインの世界で功績を残しています。そのうちのひとつが、昭和28年に銀座に設置された森永製菓広告塔。地球儀で言うところの緯線・経線方向に張り巡らされた光の線が点滅し、赤道にあたる部分には「森永ミルクキャラメル」「森永チョコレート」の文字が回転する仕掛けがほどこされています。第6回広告電通賞を受賞したこの広告は銀座の広告塔のはしりとされ、夜空に輝くネオンの地球は、戦後復興の象徴として人々の心を明るく照らしました。

かめくら ゆうさく
亀倉 雄策 さん (大正 4 年 4 月 6 日 - 平成 9 年 5 月 11 日)

旧吉田町出身のグラフィックデザイナー。燕市名誉市民。1964年の東京オリンピックのポスターやグッドデザイン賞のロゴマークをはじめとして、多くの素晴らしいデザインを世に発表。昭和 55 年紫綬褒章受章。平成 3 年文化功労者選出。

教師としての操

昭和40年から、操さんは多摩美術大学で実技指導にあたります。翌年に日本画科教授に就任し、素晴らしい指導力を発揮しました。当時は安保闘争により学生運動が活発で、大学の休校が相次いでいましたが、その中でも操さんは学生思いの先生として評判でした。操さんはよく学生たちを自宅に呼んで話をしたり、作品を見てあげていました。金銭的に苦しい生徒に対しては、住まいや学資、留学費用などの援助も惜しみませんでした。一方で指導は厳しく、学生の描いたキャベツの絵にやかんでお湯をかけて「こんなキャベツ食べるか。やり直し」なんてエピソードも。

●「横山様式」で常識を破る

青龍社に入会した操さんはすぐに頭角を現し、青龍展受賞の常連となります。特に、昭和31年の《炎炎桜島》は青龍展始まって以来二人目となる最高賞の青龍賞に選出。それまで過去27年の歴史の中で受賞者は落合朗風だけであり、これは大変な快挙でした。操さんは横山様式と呼ばれる作風を作り上げ、観客を圧倒する大作を次々に発表します。画題、大きさ、色使い、構成に至るまで、これまでの常識を覆した「新しい日本画」を

世間に突きつけました。

龍子に次ぐ存在として知名度を上げますが、その一方で、古参メンバーの風当たりは年々強くなります。昭和37年、操さんは青龍社を脱退。青龍社時代の作品の大半を焼却処分し、後ろ盾のない中、自分の作風で戦うことを決意します。

●「一日一日を大切に烈しく生きなければならぬ」

無所属となっても、その人気は衰えませんが、特に、親しみやすさと分かりやすさで日本人の心を捉えた富

士山のシリーズは、操さんの代名詞となり、注文が途絶えず、数多く制作されました。売り絵が好調な中、操さんは「水墨こそがこれからの日本画を支える」と主張し、水墨画を描き始めます。その頃の作品《越路十景》は、

八景が越後（新潟県）、二景は越前（福井県）と越中（富山県）で、いくつもの挑戦的な技法を取り入れながら、郷里の姿を穏やかに捉えています。順調に作家活動を行っていた操さんでしたが、昭和46年に脳卒中で倒れ、右半身不随に。筆も持てず、

画家として絶望的な状況になります。が、決して諦めませんでした。「絵かきは絵が描けなくなったら死んだ方がいいのだ。だから生命がある限り、一日一日を大切に烈しく生きなければならぬ」とよく口にしていたと言います。左手で絵を描く訓練を重ね、1年半後に展覧会に出品するまでに復活。静謐で情感漂う作品を20点ほど残しています。

亡くなる直前まで絵を描いていた操さん。画学校時代から晩年に至るまで、生涯を賭けて常に日本画に向き合い続けました。

操と青龍社、それから



▲ 左手で制作をする操さん。墨は奥さんの基子さんがすっていました。

絵を描きたいという強い希望により、リハビリセンターを退所し、家で落款の「操」という字の練習から始めたそうです。